

ロールシャッハ・スコアリングシステム片口法と Exner 法の比較 (2) 反応決定因・形態水準評定・ 反応内容・平凡反応について

中京大学心理学部・心理学研究科 八尋華那雄^{注1}
中京大学心理学研究科博士後期課程 明翫 光宜

A comparison of Kataguchi's and Exner's scoring systems for the Rorschach test: (2) Determinants, form-level rating (form quality), contents and popular responses

YAHIRO, Kanao (Chukyo University school of Psychology)
MYOGAN, Mitsunori (Graduate School of Psychology, Chukyo University)

The authors report, as the second part of a series, comparisons between the 2 scoring (or coding) systems for the Rorschach test - Kataguchi's and Exner's (A Comprehensive System). This second report compared determinants, form level (form quality) rating, contents and popular responses for each scoring system. Scores/symbols provide numerous valuable indications regarding testee status in the next interpretational stage. The results indicate, particularly through the rating of form level, that both scoring systems basically aim for objective analysis, with Kataguchi's system more open to the narrative approach of a tester, while Exner's system is strictly oriented to an evidence-based approach.

Key words: Rorschach scoring system, Kataguchi's system, Exner's system

はじめに

このシリーズは、現在わが国で最も広く用いられている二つのロールシャッハ・テスト（以下ロ・テストと略す）のスコアリングシステムである片口法（修正 Klopfer 法，片口-Klopfer 法）と包括システム（Exner 法）両法を比較して、その異同を示そうとするものである。学部・大学院の臨床査定演習等で教えられるロ・テストのシステムは、このどちらか一方であることが多い。両法以外にも名大法、阪大法、力動論的解釈法（慶大法）などがあるが、他法のシステムに通じていない専門家は多い。学んできたシステムに親和性を感じ、他法の長所を利用できないことも生じている。長い臨床経験の中で、どのシステムを中心に用いるかを査定者は選べば良いが、この二つのシステムの関係を知っておくことは大切なことと思われる。

表題にあるロールシャッハ法のスコアリングシ

テムの片口法と Exner 法の比較のうち施行法や反応領域の記号化については（1）で既述した。今回はその（2）として、記号化の中で最も重要な決定因と形態水準評定を取り上げ、さらに反応内容と平凡反応についても比較を試みる。（1）と同様に両法の異同を、片口（1987）、Exner（高橋ら監訳 1991）、藤岡（2004）を基にまとめていく。

続いて次の（3）では、スコアの整理集計と解釈に到る作業について、（4）では事例を用いて両法のアプローチの実際を行う予定である。

反応決定因の記号化

片口法と Exner 法の決定因の記号化は、ほとんど同じものとかかなり違った部分とがある。形態・運動・色彩因子はあまり違いがなく、濃淡で大きな違いがある。解かり易くするために二つの表にまとめ、各々についてその違いを記述することにする。

形態反応：形態反応（F）は、両法共に、形のみが反応を決める因子となっている時に付与される。

注1 kyahiro@lets.chukyo-u.ac.jp

注意すべきは、Exner 法には決定因の優先順位がなく、複数の決定因が用いられている場合（Exner 法でいう blend）である。blend の場合 Exner 法では F はコードされない。しかし、片口法では、F が主・副どちらの決定因にもなり得る。例えば、自由反応段階では人の形を認めただけで、質問段階に至ってようやく動作を感じずる場合 F→M（M 傾向）と表示し、M を副分類とする（片口, p76）。他にも、人の運動が静的な場合には、F を主決定因とし副に M をとる。F を副決定因とすることは原則的にはない（片口, p72）が、見られていた運動が否定された場合とか、あるいは、複数の概念を一度に見ていて、主内容の決定因は運動だが、副内容は形態が詳しく述べられているならばその概念に対する決定因は F なので、副決定因として F をとる場合など

である。なお片口法では、副 F は集計の段階では無視してもよいことになっている。

運動反応：両法とも、運動を決定因とする基本條件は、被検者が“自発的”に動きに言及することである。運動反応には、人間や動物そして物や自然物といった運動の主体があり、それらの主体は形態を伴っていることが多い。人間や動物は原則、形態確定概念なので M, FM であるが、Exner 法では『これは狂気を表している』『ひどい憂うつですね』『嫌な臭い』『大きな音です』といった形態をもたない、抽象的あるいは知覚的体験としての M があり、これを Mnone とコードする」（藤岡, p57）とある。

Mnone は、片口法にはないスコアである。『狂気』『憂うつ』『臭い』『音』などの状態や感覚体験が運動反応とされるのはなかなか理解し難い。Klopfers

表1 決定因（形体・運動・色彩）のスコア／シンボルの比較

決定因子	片口法	Exner 法	備 考
形態反応	F	F	Ex：他の決定因との blend の場合コードしない
人間運動反応	M	M	Ex：運動の活発さで、active/passive の評価を加える
動物運動反応	FM	FM	Ex：動きの活発さの評価は M に同じ。
無生物運動反応	Fm mF m	m	Ex：動きの活発さの評価は M に同じ。また Fm, mF といった形態評定はなく m のみ
色彩反応			
形態色彩反応	FC	FC	形態の説明＋適切な色彩の使用
色彩形態反応	CF	CF	形態よりは色彩の方が決定因子
純粹色彩反応	C	C	形はなく、色彩のみが決定因子
色彩命名反応	Cn	Cn	色の名前だけを呼称する反応
彩色投影反応			無彩色カードに色をみる反応
形態彩色投影	FC p		Ex：CP は特殊な色彩現象として特殊スコアでコードされ、決定因には含まない
彩色投影形態	CF p		
純粹色彩形態	Cp		
不自然色彩反応			色の用いられ方が不適切・不自然な反応。
形態不自然色彩	F/C		Ex：特殊スコアの INC に該当する
不自然色彩形態	C/F		
色彩象徴反応	Csym		Ex：特殊スコアの AB に該当する
無彩色反応			決定因に白・黒・灰色が用いられている反応。
形態無彩色反応	FC'	FC'	
無彩色形態反応	C'F	C'F	
純粹無彩色反応	C'	C'	

* 表中の Ex:は Exner 法の略

法ならば、これらの判断の決定因を付した symbolic response (片口法では sym は Csym のみだが) としてスコアされることになる。

非(無)生物の運動反応は、片口法では、その主体の形態の確定度によって、Fm, mF, m の 3 種を分けて記号化するが、Exner 法では m のみである。

また、Exner 法の特徴は、全ての運動反応に運動の強さ活発さを積極的 (active) と消極的 (passive) に分けて肩文字コードする点である。片口法にもその概念は、伸張と屈曲という表現であるが記号化はせず、特徴的に見られるなら継列分析の中で拾いあげていく。

内容が動物でも、運動がその動物に一般的でなく、人間の運動に擬している場合は M とするのは両法とも同じである。

色彩反応：両法の違いはいくつかあるが、まず形態と色彩の統合に関する違いについて述べる。Exner 法では、被検者の説明から、反応を作るのに形態と色彩のどちらがより大きな決定要因になっているかで FC か CF が決まる。「火」のような形態半確定概念であっても形態に言及している場合には FC とコードされる。片口法では、原則として概念の形態確定度 (見られたものにどの程度共通の形態イメージがあるか) が決め手となる。形態確定概念で形態と色彩が決定因の場合は FC、形態半確定概念に色彩が用いられている場合は CF、形態半確定概念では C となる。ただし、形態半確定概念であっても形態を中心にその特徴を指摘していれば FC となるし、また、形態確定概念であっても色彩のみを強調する場合は CF とする。

次の違いは、同じ色彩反応を含む複数の決定因がある場合の取扱い方である。「海底 (カード X)」のような形態半確定概念で、形態にはあまり関係がなく、色彩が主決定因 (CF) だが、その一部に FC が含まれる場合、片口法では CF, FC となり、二つの色彩決定因をとる。しかし、Exner 法では、このような blend 反応の処理はステップダウンと呼ばれる原理で、CF のみをコードする。この場合は、「一つの反応で、同じ決定因で、形態の統合度が異なる決定因が使われている場合は、最も形態に重きをおいていない決定因一つをコードする」(藤岡, p65) に準じているが、同じステップダウンでも、「『赤いのは血』だけだと、C とスコアすべき反応でも、それが形態を持つ別の対象 (『二頭のクマが闘

っている。クマは怪我をしている』) に属し、直接結びついている場合この血の反応は CF とする。」

両法の色彩決定因の最も大きな違いは、Cn を除く不自然彩色反応と色彩象徴反応が片口法には用いられていることであろう。片口法の基となっている Klopfer 法には不自然彩色反応として、 $F \leftrightarrow C, C \leftrightarrow F$ (こじつけ彩色反応 Forced color: 「ピンクの白熊」といったその色彩の用い方が非常に不自然で無理のある反応に対して与えられる) と F/C, C/F (任意的彩色反応 Arbitrary color: 「色刷りの地図」や「解剖図」のように単に色彩が領域を区切るために用いられており、他の色に置き換えても差し支えない場合) がある。片口は、この二つを F/C, C/F に吸収して不自然彩色反応と名付けている (片口, p81)。一方、Exner 法は不自然彩色反応に対して特殊スコアの INC をコード化し、処理する (Exner, 1986, p197; 菊和・空井, 1993, p22-36)。

本来、Klopfer 法では sym は、全ての決定因の後に付与されていたが、片口法では、最も頻度の高い C のみに sym を用い、色彩象徴反応だけがスコアとして残された (片口, p83)。Exner 法では、象徴的意味合いの明細化は、特定の防衛機制に関する特殊スコア (Special Scores) の一つである知性化防衛に関係する AB (abstract) とコードする。反応内容に Hx (人間的経験) や明らかに象徴として用いられている場合につける。彩色投影反応 (Cp) は AB と同様、否認の防衛に関する特殊スコアとして処理される。

陰影 (濃淡) 反応

片口法には表 2 に示したものの他に、三次元を二次元に投影した弱立体反応 (tone-down shading effect F k, k F, k) というスコアがあったが、1987 年の改訂版から削除された (片口, p85)。k に対応する反応内容が「地勢図」「航空写真」「レントゲン写真」に限られているからである。これらの反応が濃淡で決定されているなら、片口法では FK に、Exner 法では FY, YF となる。

片口法の特徴は、簡略ということである。従って、sym は C のみに限定され、k も削除し、Klopfer 法で用いられているこじつけ彩色反応 ($F \leftrightarrow C, C \leftrightarrow F$) や Cdes (色彩叙述反応: 「これは、水彩絵の具で描いた」といった表現) も除外されている。陰影反応の扱い方も同様で、Exner 法の V, Y, D 即ち奥行き・立体感・三次元の感覚 (V), 「レントゲン、

表2 決定因（濃淡・陰影）のスコア/シンボルの比較

決定因子	片口法	Exner 法	備 考
材質反応 形態材質反応 材質形態反応 純粋材質反応	Fc c F c	FT TF T	濃淡から材質感を知覚する反応。
立体（通景）反応 通景・立体反応 形態立体反応	FK (FK)	FV VF V FD	濃淡が引き起こす奥行きや三次元の知覚 Ex: V 反応は展望反応という。 Ex: 形態から生じる遠近感は形態立体反応とする。
拡散反応 形態拡散反応 拡散形態反応 純粋拡散反応	 KF K	FY YF Y	Ex: 形態+濃淡で FT, FV 以外の反応 Ex: 濃淡+形態で TF, VF 以外の反応 Ex: 濃淡のみによる T, V 以外の反応

表3-1 形態水準評定 片口法

スコア	水準	基 準
+	優秀	概念と blot の一致度、建設的明細化、結合性（構成度）の内、全部あるいは二点が優れている
±	標準（良好）	P あるいは P に準ずる頻度の高い反応。最小限あるいはそれ以上の明細化を伴う的確な反応
±	許容	半確定概念（二次的形態）の反応のほとんど。標準水準だが、明細化に乏しい反応や弱体の明細化があり反応質を減ずる場合。
-	不良（病的）	概念と blot の一致度が見られない反応。破壊的明細化が与えられたり、非現実的結合がなされた場合。

光っている、色の対比や明暗」(Y)、形態の特徴から奥行きや三次元が感じられる形態立体 (D) が全て片口法では FK で示される。ただし、Exner 法での YF、Y の「雲、煙、霧、宇宙空間」などは、C'F や C' と区別しながら KF、K をつける。

形態水準評定 (Form-Level Rating/ Form Quality)

形態質の評価は、「反応として与えられた概念と blot との一致という意味での反応の正確さ」(片口, p111) の評定のことをいう。片口法では、概念の持つ形態的特徴と blot の形態とをマッチさせようとする明細化、その反応がその blot 領域でどの位の頻度で見られるかの情報そして結合性を加えて、総合的に反応の正確さを判断する手掛かりとしている (片口, p111-112)。Exner 法では、評定者間の

評定の信頼性と一貫性が検討され、Beck と Hertz の頻度分布と Mayman の形態の適切な使用の可否評価をもって形態水準 (Form Quality) の評定法とした (Exner, p174-179)。

片口法の形態質の評定は、概ね Klopfer (1954, p219-239) の形態水準評定に対応している。Klopfer 法では、まず全ての反応に blot との形態のマッチ度に基本点 (Basic Form Level) を付ける。基本点は概念の持つ基本的形態と blot の形態が合致しているかどうかを問うもので、運動、色彩、濃淡や基本的形態以外の形態の明細化を評価するものではない。基本点 (+1.5~-2.0 までの 8 段階) が 1.0 を超える反応では、次に建設的明細化や結合性それぞれに 0.5 ずつの加算、弱体や破壊的明細化については減算を行う credit と呼ぶ手続きを行う。この結果 +5.0 から -2.0 までの 15 段階の評価が可能となる。+2.5 以上の評価が片口法の + に相当す

表 3-2 形態水準評定 Exner 法

シンボル	水準	基準
+	優秀 (Superior-overelaborated)	形態の用い方が適切で、豊かな明細化がある。独創的である必要はない。
o	普通(Ordinary)	多くの人に一般的に見られる反応で、形態の特徴も blot に適合している。
u	特殊(Unusual)	頻度の低い反応。blot との適合度は著しく歪められていない。了解できるが、稀な反応。
-	マイナス(Minus)	形態の特徴を無視し、勝手に輪郭を作ったりした強引な反応。

表 4 反応内容のスコア/シンボルの比較

反応内容	片口法	Exner 法	内容に含まれるもの
人間全体	H	H	人間の全体像。歴史上の人物であれば片口：(H), Ex: Ay を付加
非現実的人間の全体	(H)	(H)	架空で想像上の人間の全体像。悪魔・幽霊・天使・妖精など。
人間の部分	Hd	Hd	人間の部分像。手・頭・顔・上半身・首のない人など。
非現実的人間の部分	(Hd)	(Hd)	架空で想像上の人間の部分像。悪魔の顔の部分、魔法の頭など。Ex: 様々な種類のお面も。
人間的体験		Hx	形態のない人間の感情や感覚的体験。愛・憎しみ・怒り・抑うつ・幸福・音・臭いなど。多くは特殊スコア AB をコード。
動物全体	A	A	動物の全身像。
非現実的動物の全体	(A)	(A)	想像上や架空の動物の全体像。
動物の部分	A d	A d	動物の部分像。Ex: 動物の毛皮も含む。
非現実的動物の部分	(A d)	(A d)	想像上や架空の動物の部分像。
解剖	At	An	骨・筋肉・内臓など。片口：下位カテゴリーとして Atb(骨), Ats (内臓・筋肉), X-ray (レントゲン写真), A.At (動物の解剖)
性	Sex	Sx	生殖器および性的行動に言及した反応。
肛門	Anal		肛門と臀部の一部としての肛門。
動物製品	Aobj		毛皮・敷物・剥製・ワニ皮のバッグなど。 Ex: Ad, 一部は室内の家財道具 Hh として処理あるいは芸術性が高ければ Art。
家財道具		Hh	室内の家財道具。椅子・ベッド・皿・銀器・敷物など。片口：多くは Obj とする。
物体	Obj		家具や花瓶などの装飾品。あまり大きくない人が作った物。Ex: Hh に相当。
衣服	Cg	Cg	身に付ける衣服や眼鏡やアクセサリなど。Ex: ほぼ衣服に限定。片口：Cloth と表記する者もいる。
建造物	Arch		城・寺院・門などが作った大きな物。片口：飛行機・船・ロケットなども。これらは Ex: Sc(Science) とされる。
科学		Sc	細菌・病原菌・空想科学上の怪物・宇宙船など科学や空想科学的なもの。これらは片口：A, (A), Arch などとスコアされる。
芸術品	Art	Art	絵画・彫像・子供の描いた絵など。Ex: 宝石・紋章も含む。片口法ではそれらは Cg や Emblem。
植物	pl. f	Bt	花・木・海草・葉、茎など植物の部分など。片口：花に関する内容を独立して Pl.f とする。
自然	Na	Na	植物, 地理, 風景よりも広範囲な自然の内容。空・雪・水・夜・虹・太陽・海など。

地理		Ge	特定あるいは不特定の地図。島・半島・大陸とその地図。
地図	Map		地図や地勢図。
風景	Lds	Ls	陸や海などの自然の風景。地景, 海景。Ex: 木や灌木は Bt。林や森は Ls。
抽象	Abst		抽象的な概念。人生・歓喜・悲哀, 抽象芸術, 象徴性など。Exner (1991) にはあるが, 藤岡 (2004) にはない。特殊スコア AB としてコード。
人類学		Ay	特殊な文化的・歴史的意味を持つもの。トーテムポール, タイの寺院, 縄文土器。片口法ではなく, 分類不能であれば新しいカテゴリーを作る。
血液	Bl	Bl	人間や動物の血に関するもの。
雲	Cl	Cl	雲や煙の反応。片口では霧・霞も含むが Ex: 霧・もやは Na。
火	Fire	Fi	火または炎。Ex: 煙は Fi (通常 m を伴う)。
爆発	Expl	Ex	爆発あるいは爆風。原子爆弾・火山の噴火・花火など。Ex: 常に m を伴う。
食物	Food	Fd	食べ物・アイスクリーム・野菜・肉など。りんごや蕪など Pl との区別が困難なことがある。
楽器	Music		ギター・バイオリン・三味線・琵琶など。Ex: Sc, Art, Ay などに分類される。
その他		Id	Idiographic (個性記述的) の略。分類不能な内容のカテゴリー。

(片口: は片口法, Ex: は Exner 法の略)

る。±は+2.0から+1.0, 平は基本点 0.5 (半確定概念の反応) と credit の結果弱体の明細化で-0.5 と評価された反応の一部のものである。-は基本点 0.0 (形態不確定概念) から-2.0 の反応である。逸脱言語表現などの破壊的明細化は-と評定される。

Exner 法には, 形態水準評定表があり, 各カードの全体や部分に見られるさまざまな反応がリストアップされ, その各々の反応の FQ が示されている。

反応内容 (Contents)

両法とも, 複数の概念が用いられていれば, それらをスコアするのも, また主要な内容を (主反応として) 最初に記すのも同じである。Exner 法では, 分類不能なものは Id とするが, 片口法では幾つかの新しいカテゴリーを作ることを認めている。

Exner 法では, Na, Cl, Bt, Ls, Ge が同時に用いられている場合, コード化に決まりがある。Na あるいは Cl が優先しどちらか一つをスコアする。Na, Cl がなく, Bt, Ls, Ge の組み合わせの場合は, どれか一つを付ける。この処理は, これらが「孤立指標」を構成しているからで, 一つの反応で過剰に計算されないようにするためである。

平凡 (公共) 反応 (P 反応)

片口は, 6 人に 1 人以上という基準と, 標本数が最も多い児玉(1958)とカロ研究グループの (1972) 資料を基に決定していた P 反応に, 二つの修正を加えたりリストを示した (片口, 1987, p100-103)。Exner 法では, 三分の一のプロトコルに生じる反応を P 反応とする。Exner 法の日本への導入に際し, 高橋ら (2002) が日本人を対象とした P 反応を検討している。以下に, Exner (1995) の P と高橋らの P を表 5-1 に, 片口 (1987) の P とロールシャッハ研究 31 号に松枝ら (1989, p23-40) が示した P 反応リストを表 5-2 に示す。

松枝らの P を挙げたのは, 筆者らが日頃の臨床場面で遭遇する頻度の高い反応は, むしろ彼らに近い印象をもっているからである。日本人を対象とした高橋らの P は, 松枝らの P にほとんど含まれているが, 片口の P と比較すると I, IV, VI, VII, VIIIカードに多少のずれが見られる。

考 察

決定因, 形態水準評定, 反応内容, P 反応には上記のような異同が両法に見られる。形態・運動・色

彩・濃淡の決定因 4 つのカテゴリーは同じだが、目立った違いは、複数の決定因の扱い、形態質の評定、不自然彩色反応の扱い、濃淡の記号化にある。

複数の決定因の扱い方

blend がある場合、片口法では、一つを主決定因とし残りは副決定因とする。集計に際して主決定因は 1、副決定因は 0.5 とカウントされる。Exner 法では、軽重は付けず皆同等に扱われる。当然、集計した際に、各決定因の出現数の range や期待値は

異なってくる。片口法が準拠している Klopfer 法は、主決定因は主反応領域に対して自由反応・質問の両段階の何れでも自発的に言及された決定因子に与える。最も強調して明確に述べられたものや自由反応段階で言及されたものが優先する。副決定因は、主領域でない部分の説明や質疑によって引き出された決定因子、あまり確信がなかったり明確に言語化できていなかったり、強いて言えばというようなレベルの説明に対して与えるとしている (Klopfer,

表 5-1 Exner と高橋らによる P

図版	Exner (1995) の P	高橋ら (2002) の P
I 図版	W コウモリ, チョウ	W コウモリ, 動物の顔
II 図版	D1 四足獣	W 二人の人間, D1 動物
III 図版	D9 人間	D9 人間
IV 図版	W か D7 人間, 人間の形をしたもの	W か D7 人間, 人間類似のもの
V 図版	W コウモリ, チョウ	W チョウ, コウモリ
VI 図版	W か D1 動物の皮, 毛皮	W か D1 毛皮, W 楽器
VII 図版	D9 人間の顔 (D1, D2, Dd22)	W 二人の人間
VIII 図版	D1 四足獣	D1 四足獣
IX 図版	D3 人間, 人間の形をしたもの	なし
X 図版	D1 クモ, カニ	なし

表 5-2 片口と松枝による P

図版	片口 (1987) の P (計 13 個)	松枝ら (1989) の P (計 21 個)
I 図版	W か W コウモリ	W チョウ・ガ, コウモリ
	W か W チョウかガ	W 動物の顔
II 図版	W か W 人間	W 仮面
	W か D1 四足獣	D1 人間
III 図版	W か W 人間	W 人間
		D1 クマ, 犬
IV 図版	W か W 毛皮類	D1 人間
		D2 人だま, 火
		D4 チョウ
		D4 リボン, タイ
V 図版	W か W 毛皮類	W 毛皮
	W か W コウモリ	W 怪獣
VI 図版	W か W チョウ・ガ	W 巨人, 怪人
	W か W 毛皮類	W チョウ, ガ, コウモリ
VII 図版	W か W 人間	W 蝶人, 鳥人
	D2 四足獣	W か D2 毛皮
VIII 図版	D1 四足獣	W 楽器
	D2 花	W か D2 人間
IX 図版	なし	D1 四足獣
X 図版	なし	D2 花
		なし
		D1 クモ, カニ

p96-97)。このような基準から複数の決定因があったとしても均一には扱わないのである。Exnerは、この複数の決定因の扱いについて、「Klopfersは、提唱した質問段階の技法がより詳細になり、スコアリングのカテゴリーの数が急増するにつれて、多くの複数の決定因子のスコアが解釈を困難にする事実気付いた。さらに彼は、概念の一部にしか関連しない決定因子や、質問段階でややためらいがちに与えられた決定因子は、『基本的』なパーソナリティには、『一次的』決定因子ほど重要でないと確信するようになった」(Exner, p165)と説明して、主副に分けることは、Rorschachのアプローチから逸脱しており、主副に分けたのはKlopfersの体系の大きな限界の一つであり、主副を分け難い時にMを優先させ続けて色彩・材質・無彩色の順に重要とする階層を用いていることを批判している。また、他のシステムが解釈仮説を作るに当たり、全ての決定因子に等しい重みを与えていることも強調している。

片口法では、「反応決定因のカテゴリーは、主として情緒的側面を反映し、感受性の豊かさ、文化の程度、情緒的統制の成熟度とその性質、不安の程度とその性質など、についての手掛かりを与える」(片口, p177)という。Exner法では、決定因は「反応を生み出した複雑な知覚・認知の過程に関する情報を得るためのもの」(Exner p 120)であるとしている。複雑な知覚・認知、特に認知の過程には、片口の言う情緒的側面が影響していると考えられるから、両者の言っていることは、ほぼ同じと言える。筆者らは、被検者がさまざまな手掛かりを用いる能力を持つかどうかを反映させるべきだと考える。カードにある形や色や濃淡を複合させるのは、当然かつ自然なことであり、さらにそこに運動感覚や立体・通景という「自分の中に準備されているものの投入」(辻, 1997, p105)さえする。そのような複合力を行使できる力(超越可能性)が、心の成長をもたらすと辻(p91)は述べている。複数の決定因を適切に複合して用いることが心の成長を予測するならば、用いられた全ての決定因を等質として扱うことの方が、被検者の複合力を知るためには妥当であると考えられる。

形態質の評定

片口法は、ほぼKlopfers法に準拠して、blotと概念の持つ形態との一致度を、部分の指摘の的確さで基本的には評価している。Exner法は、たくさ

んのプロトコルに出現した概念の頻度を手掛かりとしている。極端に言えば、指定されたblotに指定された内容が見られれば、その明細化の程度は問わずに形態質の評定がなされる感がある。

両法の違いで一番の問題点は形態質の評定にあるように思われる。特に、独創反応でblotとの適合が極めて良いと判断できる反応の形態評定であろう。Exner法では、uかーと評定される。片口法では+や±と評価されるであろう。また、通常の反応(片口の±, Exnerのo)でも、形態の説明が乏しい時には、片口法では干となるのに対しExner法ではoのままであるという違いもある。筆者らは、実に感動的とさえ言える素晴らしい独創反応に何度も出会ったことがある。blotとのマッチ度も高いものも多かった。当然+とされるべきものもあり、出現頻度が少ないと言うだけでuの評価を与えるべきではないと考える。uやーとコードされ、現実吟味が悪いという評価につながるならば問題である。さらに、Exner法では、勝手に輪郭を作ったりした反応(多くの場合、blot間のSに輪郭を引くことをいう)もーとする。強引な場合は肯けるが、補った方がよりの確になる場合もあるのではないかと思われる。そのような際にも機械的にーとするのには疑問を感じる。

片口は、「不良(病的)水準-は、blotとの対応を失った反応、奇妙な独創反応、ある種の全く形態を失った反応、第一級の逸脱言語表現に相当するものである。これらは幼児の場合は別として、一般にかなりの人格障害、即ち自己統制や現実吟味の著しい低下、強度の不安感、論理的思考の障害、内閉性などを示す」(p215)として、適当な割合の干の存在は適度な緊張の緩和と弛緩を反映して、むしろ望ましいとしているのに対し、-は問題のある反応だとしている。一方、Exner法では、-反応は健常者にも見られ、それだけで病的な所見とは考えない。逸脱言語表現は特殊スコアでコードされるので、形態水準では評価されない。筆者らの経験からも、健常成人に少数の-反応が見られることは多い。

もう一つの問題点は、片口法の+の評定にある。片口法の形態水準+は、Klopfers法の+2.5以上の反応に相当するが、筆者らの経験では、形態確定的概念で運動、色彩や結合性などに言及する反応は多々見られ、直ぐに+2.5の評定に達する場合が多い。それらに+の評定を与えれば、+の%が容易に上がる可能性がある。+は本当の意味で質の良い反応で

あるべきで、+3.0 以上の方が妥当であると思われる。

不自然彩色反応の扱い方

不自然彩色反応の扱いについては、現実を無視した強引な色の処理に対する評価は、Exner 法では決定因で分類することはせず、不適切な結合に関する特殊スコアの INC として処理される。任意な色の用い方に対するスコア上の処理法はない。筆者らは、不自然彩色はカードにある特徴をそのまま無批判に受け入れているという意味で、場依存的な対処を反映していると考える。彩色投影は、視覚的・感覚的で、ないものがあつた方がより自分の概念やイメージに適合するとしているという意味で、主観的であつたり完全主義的な傾向を反映しているのかも知れない。いずれにしても、実証的な研究が一層必要なテーマである。知覚・認知の過程の情報という点からすれば、決定因として扱って良いのではないかと考える。

濃淡の記号化

片口法には c と K の 2 種類しか濃淡を処理するスコアがない。濃淡は材質・奥行き・立体 (三次元)・拡散とさまざまな知覚の決定因となる。Exner 法には、それらに対応して T, V, Y のコード (D は形態立体で、形態から奥行き・三次元・遠近を知覚するものだが、片口では FK で処理される) があり、細かな分類が可能である。濃淡の意味する解釈仮説がまだ決定的ではない現在、材質を除く遠近・立体・拡散を一つの K でまとめてしまうのは問題があるように思える。T を含め、V, D, Y それぞれが人格の何と関連しているかを、細かに検討すべきであろう。濃淡の記号化に関しては Exner のシステムの方が処理する実情に合っている。

反応内容について

反応内容の分類は、Exner 法の方が簡素である。必要以上にカテゴリーを増やすことは避けるべきだが、CR (content range) が被検者の生活空間や体験の巾の広さを示すとすれば、新しいカテゴリーをも作れる片口法の方が、そのことをより反映し得るのではないかと考えられる。細かなことだが、藤岡 (p68) は、(H) の中に、ピエロや王様も想像上の人間反応としているが、これは H とすべきであろう。また、毛皮の類を Ad で処理するのも違和感がある。Ad は、生きている動物の部分という意味が強く、Hh でスコアされるべきではないかと考える。

平凡反応について

平凡反応には時代的・文化的な差が大きい。高橋らの P は、筆者らの経験でも、片口や Exner の P よりも現代日本人の頻度の高い反応内容を捉えているように思える。筆者らが日頃の臨床場面で遭遇する頻度の高い反応は、むしろ松枝らに近い印象をもっていると述べた。松枝らのリストは非常に役立つが、P レベルの反応も含まれており、例えば V 図版の蝶人・鳥人などそれほど多くない内容もあつて、再考が必要だと思われる。

Exner 法は、上記のコード化に続いて、認知障害・固執・自己知覚と対人関係の知覚・特定の防衛機制に関する特殊スコアを付ける手続きを踏む。これらは、被検者の発言の中から特異な表現や反応傾向を抽出する作業である。それが終わると構造一覧表の作成段階となる。そして、変数を基に八つの心理的機能のクラスター分析から解釈を行うのである。

片口法では、プロトコルの言語的表現と各カードの反応時間や反応内容を吟味する継列分析に進み、特徴を抽出した後に Scoring List, Basic Scoring Table, Summary Scoring Table (修正 BRS での人格統合水準の評定を含む)、Psychogram の記入を行う。その際、特異な言語表現や反応傾向に対して Rapaport (1946) による逸脱言語表現のチェックも行う (片口, p275-280)。これらの処理から得られた情報を基に、総合的な解釈を行うのである。

片口法のスコアリングシステムは学習のし易さも考慮して簡略なものとなっている。片口法に準拠する検査者は、その分プロトコルの言語的表現の吟味を大切にす。プロトコルを再三に亘って読み、プロトコルから伝わってくるものを読み取ろうとするのである。榎本 (1999, p22-23) は、知覚機能自体にストーリー性を求める傾向があり、インクのシミによってできた単純な刺激に対してもストーリーを見て、理解可能な説明可能な意味のあるまとまりで捉えようとする述べている。そのまとまりを創出する過程と背景に思いを馳せると言ってもよい。それ故に、片口法には検査者の自由度が大きく残されているとも言える。このような意味で、片口法は narrative based と言えるのではないだろうか。他方、evidence based が、正確な手法で客観的検討に耐え得るプロトコルを得ることであり、解釈に検査者の主観を一切入れないことであれば、それは Exner 法が目指していることに近い。Exner 自身も、「最終的な解釈」の項 (p514-520) で、継列分

析と言語表現の分析の重要性を説いており、決して被検者の言語的情報を蔑ろにしているわけではないが、やはり数量的な情報に重きを置き、evidence basedを目指しているのがExner法の特徴であろう。

はじめにの項でも述べたように、ロ・テストという検査技法を使い続ける中で、自分なりの包括システムを作り、実践に役立つように図版を活用できるようになることが肝心なことだと考える。心理療法でも一つの治療理論や技法では、多様な人間に対処することはできないと同様に、ロ・テストでも幾つかの納得のいくシステムを統合する作業を個人の中で行っても良いのではなかろうか。

文 献

- Exner, J. E. Jr. 1986 The Rorschach: A Comprehensive System Vol. 1: Basic Foundation
現代ロールシャッハ・テスト体系（上・下）高橋雅春・高橋依子・田中富士夫監訳 金剛出版 1991
p120, p165, p174-179, p514-520
- 榎本博明 1999 「私」の心理学的探求—物語としての自己の視点から— p22-23 有斐閣
- 藤岡淳子 2004 包括システムによるロールシャッハ臨床 誠信書房 p57, p65, p68
- 片口安史 1987 改訂 新・心理診断法 金子書房
p72, p76, p81, p83, p85, p100-103, p111-112, p177, p215, p275-280
- 苅和忠史・空井健三 1993 エクスナ-法「特殊スコア」に関する一考察 中京大学文学部紀要 28 (1)
p22~36
- 児玉省 1958 日本女子大式—日本人のロールシャッハ反応の基準 本明・外林「ロールシャッハ・テスト」(1) 223-270, 中山書店
- カロ研究グループ 1972 カロ・インクプロット・テスト解説—ロールシャッハ法の新しい展開への試み
p19, 48, 74-82 金子書房
- Klopper, B., et al 1954 Developments in the Rorschach Technique p96-97, p219-239 Harcourt, Brace & World, Inc. New York, Burlingame
- 高橋雅春・高橋依子・西尾博行 2002 ロールシャッハ形態水準表—包括システムのわが国への適用 金剛出版
- 松枝加奈 他 1988 平凡反応の時代的・文化的変化
ロールシャッハ研究 31 巻 p23-40
- 辻 悟 1997 ロールシャッハ検査法 p91, 105 金子書房

(受理年月日 2004年9月30日)